

2025 年度 4 月入学 博士後期課程 一般入学試験・国費留学生等入学試験
2025 年 9 月入学/2026 年 4 月入学 中国国家建設高水準大学公費派遣研究生受入制度
事前課題

課題文を読んで、2500 字から 3000 字程度で設問に答えなさい。その際、資料や文献を参照し、それらを明記すること。参考文献や引用文献等のリストも上記文字数に含みません。

設問

課題文の論旨を簡潔にまとめなさい。その上で、日本語教育学においてはどのような研究課題となり得るか、そこで得られる研究成果の可能性、および、限界について、根拠を示しながら具体的に述べなさい。

課題文

語りのディテールから生き方のスタイルを見つけ出す

私が特に大事にしているのは、個人の「経験」を語りだす即興の「語り」である。それは聞き手に、生き生きとしたものとして迫ってくる。生き生きとした経験は、即興の語りの生々しさへと受け継がれる。生き生きとした経験こそが、客観性と数値によって失われたものだ。それゆえ語りのなかに保存された生き生きとした経験をキャッチする方法を探ることは、科学において失われてきたものを取り戻す試みである。

私は長年にわたって、看護師や子育て支援の対人援助職、そしてヤングケアラーや精神障害の当事者、ろう者（耳が聞こえない人）やアイヌの出自を持つ人など社会的な困難の当事者にインタビューをお願いしてきた。インタビューでは質問を準備せずに二時間ほどの向くままにあちこち話題が飛ぶのに任せて語っていた。インタビューの語りは、口癖のみならず言い間違いやオノマトペなどを再現する忠実な逐語録をもとにして（複数の語りを混ぜることなく）一人ひとりについて分析する。一人ひとりの語りのディテールを尊重しながら多様な話題間の連関を考える。これによって、語り手が経験してきた困難実践のスタイル、生き方のスタイル、そしてその背景にある社会状況の構造を、その語り手の視点に立って明らかにしようとした。この分析から明らかになる経験の構造には、客観的な数値が与える知識とは異なる意味がある。

個別の人生や個別の出来事を一人称の視点から分析するとき、外から見た客観的な指標では見えてこない具体的な像が生まれる。客観的なデータの背景に横たわる血肉の通った生の姿を理解できるようになり、読み手をなにかの行為へ向けて触発する。

また、語りを大事に扱うことは、語る人の経験を大切に扱うことである。一人ひとりの人生はまったく異なる。これは、「個性的」といった話ではなく、どうしたって対人関係や環境、行動は一人ひとり異なるという意味だ。人と異なる部分はしばしば偶然の出来事、とりわけ困難や苦痛にかかわる。生まれ育った環境は人によって異なる。貧困や差別もあるし、障害や病などの身体的な条件も異なる。そのため、個性的であろうがなかろうが、人生は否応なく一人ひとり異なるものになる。苦労や苦痛は取り替えが利かない偶然性と個別性において人を襲う。語りはまさにこれらを映し出す。

一人ひとりの苦労の経験は、科学的な客観性に回収することができない。だから個別の苦労をそのまま尊重し描き出すことには意味がある。そしてこのような苦労は、即興的な語りのなかにこそ背景の文脈や対人関係の布置とともに保存される。それゆえに語りをするのまま大切に扱うことが、語る人の経験を大切にすることになる。

社会科学の論文のみならず新聞や雑誌がインタビューを用いるときには、要約し、わかりやすく書き直すことがほとんどである。しかし、私はあえて「語られた言葉をそのまま

記録する」ことの重要性を主張していきたい。口癖の使い方や人称代名詞のゆらぎ、言い間違いのなかに、経験のひだと複雑さが表現されるからだ。語りのディテールを尊重しながら多様な出来事のあいだのつながりを考えることで、本人も気づいていない経験の隠れた意味を浮かび上がらせることもできる。

客観性と状況の生々しさ

私は客観性と対照させて、「経験の生々しさ」という言葉を使っている。数値によって測られるのが事物の特性だ。これに対して、経験の生々しさは、経験の強度にかかわっている。単にモノがそこに存在するだけでは生々しいとはいえない。人がそこに巻き込まれていて、出来事や状況から触発されて、人が応答せざるをえないときに生々しく切迫する。

さらに、経験の生々しさは生きている現実感の土台であるが、言葉で表現し尽くすことができない。インタビュは、出来事あるいは人生全体の要約であり、省略であり、近似値にすぎない。語る、ことが極めて厳しい経験を、あえて言葉にしている。即興的に語ることにおいて言いよどみながらかうじて多少なりともアクセスできる、語り得ない出来事があるだろう。語りが生々しさを表現するということと、経験の生々しさを語ることの難しさとは、同じことの裏表である。それゆえにぎくしゃくした語りにこそ生々しさは顔をのぞかせるのだ。このことは同時に、経験は語り得ないものでもあり、沈黙することも尊重されるべきであるということも意味している。

村上靖彦(二〇二三)『客観性の落とし穴』ちくまプリマー新書 pp.83-85, pp.103-104.